

日時 令和元年 10 月 25 日 (金) 10 時～12 時  
会場 横浜情報文化センター 7 階 大会議室

○ **青少年課長**

皆様、本日はお忙しい中、また非常にお天気の良くない中ご出席いただきまして誠にありがとうございます。開会に先立ちまして本日の出欠についてご報告をさせていただきます。本日は委員 9 名中 8 名出席で、定足数を満たしております。それでは、藤井部会長、進行の方よろしくお願ひします。

○ **藤井部会長**

よろしくお願ひいたします。それでは、ただ今から神奈川県青少年問題協議会第 8 回企画調整部会を開会します。まず議題 1 最終報告書の検討についてということです。こちらにつきまして事務局から資料に基づき説明をお願ひいたします。

○ **企画グループリーダー**

(資料 1 に基づき説明)

○ **藤井部会長**

ただ今事務局から説明がありました最終報告の素案につきまして、インタビュー調査の検証結果や最終報告の提言の方向について、またその他皆様からの説明の点も含めまして、ご意見をいただきたいと思ひます。それでは、田中委員の方から順番に、3 分程度で少しご発言、ご意見等ございましたら、お願ひいたします。

○ **田中委員**

資料 1 の 32 ページの今後に向けての提言について、事務局案としては 1 点目と 2 点目のところが、若者が分断されているような感持ちました。ポジティブに使いこなしている層と困難を有する子ども・若者への支援が切り出されている。私が、インタビューをまとめて感じたことは、その差というよりは、SNS との距離感が本当に多様であって、まとめるとういう形になるかもしれないですが、ツールを使いこなしている層と 2 点目を分けてまとめていくことが、提言の方向性としていいのかということをお悩みながらお話を伺っていました。

○ **藤井部会長**

分けているという点について、事務局の方で説明がありましたらお願ひします。

○ **企画グループリーダー**

現行の「かながわ青少年育成支援・指針」に盛り込まれていないと思われるものを記載させていただきます。協議会の御議論の中で、新たな視点を加えていくことももちろん可能です。

○ **藤井部会長**

32 ページに出ているものは、現時点での指針の中に十分には加わっていないと思われるものを入れているという状況になります。ありがとうございます。続いて、西野委員いかがで

しょうか。

## ○ 西野委員

今の時点での率直な感想でいいますと、やっぱりサンプルが少ない。一番最初から気にしていたことではありますが、このタイプの調査で、神奈川県青少年問題協議会として、どれくらいの若者たちの声を拾えているのかということです。たまたま答えてくれた人の、たまたまの意見が載っていて、これで若者たちを全て映しだしているのかと気になります。この中から、本当にあるよねという自分たちの目の前に見えている若者たちの、例えば困難を有している若者たちの声をもう少し、どうしたら抽出していけるのかということ、悩みながら聞いておりました。

例えば32ページにある「いいね」をされても自分を評価されたとは思えない。写真や絵が評価されたものとして受けとめているという人もいれば、「いいね」がもらえて私の写真や絵が評価されたという人もいるということはどうしたらいいのか。でも、その一方で投稿する内容について完璧な内容になるように準備した上で発信しているという生きづらさを前の会議で聞いたときに、本当に準備するのに大変なエネルギーをかけて、生きづらいよなということについては、すごく共感しました。ですから、どのように抽出したらいいかなと、残りの会議の中で何を議論したらいいのかと、もやもやしている感じがあります。

また、資料に記載されている円グラフは、真ん中から始まって右に向かって質問順に整理されたものが見やすいと思います。これは何か意図的に表記の仕方を変えているのかと思いましたがいかがでしょうか。

## ○ 藤井部会長

円グラフの表記について事務局からご説明ありますでしょうか。

## ○ 青少年課長

これは、特段意味のあるものではございませんので、わかりやすく修正させていただきます。

## ○ 藤井部会長

修正いただくことでよろしく申し上げます。ほかにはよろしいでしょうか。続けて墓田委員いかがでしょうか。

## ○ 墓田委員

私は、このインタビュー調査の結果と、実際に私もインタビュー調査をして3点、自分の中に気づきがあったことをお話させていただきます。例えば、やっぱりそうだなと思ったところが17ページの使用しているソーシャルメディアの状況です。やはり、若い世代と私が属している世代の50代、60代はFacebookが中心であるので、自己表現の出方が違うということであると、年齢が上の世代からいつも若者に対して何か意見の相違があるときに、自分の枠の中で、若者に対して違う意見で正そうとするということが、使っているメディアなども色々な違いがあるということ、私たち世代ももう少し認める。以前、坂倉先生が委員会で話された中で、違っていいし、そもそも一緒にしなくてよく、こちらに引き入れることもしなくてよく、大人側も説得や指導、説教をすることをやめるということに気づかなくてはならないということ、調査結果を見てすごく心に思いました。やはり、色々な世代が地域で生きていの中で、今後、健全育成というところで、違いを楽しむということで、両方がうまく交わるようなことが必要なのかなと感じました。

もう一つ、最後の提言のまとめでも創造的な未来を切り開ける若者と、困難を有する子ども・若者という二つの分断について、傾向としてはそういうふうにするということはわかってきているのですが、やはり、表裏一体で、いつ未来を切り開く子たちが、困難を抱えてしまうかということも表裏一体な世の中になっていると思います。特に、私が印象的だったのは、29ページのキャラについて、意識せずに自然と変えられるという人は、もしかしたら、うまく場面、場面で自分を変えることがあっても、変えるという意識がなく、臨機応変にする能力が高いのか、適応能力が高いのかそういうことができるグループと、未来を切り開く子の中にも、一生懸命考えながらキャラを変えていくことは、やはり苦しいので、分断化されているけれども、分断化の中に苦しみもがきながらやっているグループもあり、そして、そこからどうしても傷ついてしまうと、困難を抱えている人は場面、場面でキャラ設定ができない。「それって何ですか。なんで変えなくてはならないのですか。」と意外と個人を大切にしているということをインタビューや日頃の支援で感じています。その辺が、何か、まるっきり二分化ということではなく、表裏一体であって、でもこういう傾向にあるということなのかなということを感じました。

あともう一つ興味を持ったところが、23ページのSNSがあることで自分の悩みや抱えている問題を相談しやすいという問いについて、私はもっとあてはまるとか少しあてはまるという数値が高いという予測を立てていましたが以外にも、そちらの方が少なかったということにちょっと驚きを感じています。なぜならば、私たちの法人が、SNS相談をした時にいわゆる電話相談より率として、短い期間でも繋がってくる人数が多いという状況でした。若い人たちは、こういう方がいいのかなと思っていましたが、今回サンプルの数が少ないせいかわかりませんが、意外性がありました。相談についても、今後の展開についての意見になりますが、では、若い人は相談するときに、どういうところに行くのだろうかと考えました。やっぱり、学校時代は保健室という体の調子が悪いという目的があるところに行き、実はいじめられていることなどを相談できるという、表向きは違うけれども、ちょっと心の中に入れていっているところは、そういうところなのかなと思いました。最近、麻布十番や六本木で流行ってキャリアバーというものあり、私も先日行ってみました。普通にお酒を飲むところですが、実はキャリアカウンセリングができる人たちがバーテンダーさんとしていて、そこで、普通に一般の話をしながら転職の悩みや、会社の内容を話すということもあります。お酒やコーヒーなどを飲みながら、ちょっと疲れを癒しにしているけれども、実は目的は、転職や、色々な悩みを打ち解けだすとか、本来、例えば私たちがやっている団体ですと、ひきこもり相談承りますという形にしていますが、必ずそこにその問題で来るかというところでもない。今後は、そこに特化は必要ですが、もっと入りやすい、目的がちょっとゆるい感じの中で、実はこういう話があるということを深められるような場ができるといいのかなということも考えています。

最後に、先ほど未来を切り開く子ども・若者と、困難を有する若者と共通していえるのが、両方とも「べきお化け」、こうあるべきということがあり、いつも発信するべきということで、ずっと未来を切り開くことをやっているのと、やっぱりこれは完全完璧でないのだめという、両方とも「べきお化け」に支配されているのではないかと感じました。まとまりがありませんが、私が感じたことは以上です。

## ○ 藤井部会長

ありがとうございます。違いを楽しむというところは、すごく大事なところではないかと思えますし、違ったままで関わるような技法といったところでの支援についても考えていけないのではないかというご提案にも繋がるようなところがあったかなと思いました。

それでは坂本委員いかがでしょうか。

## ○ 坂本委員

資料1の31ページの事務局で気づいた点について、SNSを使う利用者としてのコメントが多く、積極的に活用して創造的に使いこなしていることは少ないという点については、私がインタビューをした中でもその通りだなと思いました。Instagramなどに情報をあげてはいるけれども、創造的ということとは違うと思います。情報をあげるシステムがあり、みんなが見てくれそうだからやっているだけという感じがします。最近、中学生がTikTokでは、自分で今あることを出すだけではなく、家で練習して友達同士が集まった時に動画を撮り、TikTokにあげているそうです。毎回練習して、覚えられなくて大変という話を聞いて、そんなところにも創造的とはまた違う、一緒に何かしなきゃいけない圧力といったものを、だから嫌だとその子が言っていたわけではありませんが、そういう話がありました。教育系の調査を見ていると、日本人は全体的にSNSで何かを作って発信することは少ないとありました。発信することだけが絶対的な基準ではないと思いますが、そういうところでやっぱり弱いのかなと思いました。

## ○ 藤井部会長

ありがとうございます。続いて、青木委員いかがでしょうか。

## ○ 青木委員

アンケートをまとめていただき、大変だったろうなと思いながらずっと見ておりました。ただ、西野委員が言ったようにサンプル数が少ないので何とも言えないのですが、全体的に見てみますとやっぱり、私は想像の通りの回答かなという印象でした。やはり、SNSは基本的にはあんまり信用しておらず、大半の人が特定の人だけという仲間うち、日常生活に関わりを持つ人たちだけの繋がりの中で広がっているのかなという気がしておりました。SNSを道具、ツールなのかなという気がして、私はそういう受け止め方をしております。

ただ、ツールをうまく利用すれば、青少年の育成の向上には繋がる方法が何かあるのだろうなということを少し考えておまして、やはり完全に信頼できるSNSがあれば、色々なところに相談でき、直接お話しなくても、話しづらいというケースでも、そういう機会を作つてあげるといことが、先ほどおっしゃっていた「ゆるい相談」という、ゆるい感じで相談したいという場所もできるのではないかと思います。

でも、私はやっぱり現場では、子どもたちと日常的にワイワイ騒いでいる方なので、ネットより、直接子どもたちと会話しながら、日常生活を過ごすことが一番いいのかなと思っております。以上でございます。

## ○ 藤井部会長

ありがとうございます。続いて、坂倉副部会長いかがでしょうか。

## ○ 坂倉副部会長

まず、夏休みは余りにも忙しく、データ収集に協力できず、申し訳ありませんでした。また、インタビュー及びアンケートのまとめについてありがとうございました。

アンケート結果が興味深いと思いました。SNSを使っている人は、割と使っていることや、資料1の21ページ、SNSは日常生活になくしてはならないものであるという認識では、ほぼなくてはならないものだと思っているということは、そうだろうなと思います。

気になっていることは、「あてはまる」と「あてはまらない」が、同じ位いるという項目です。例えば、20ページのSNSに自分の日常や友人・家族と過ごしたときの様子等を動画や写真を投稿する項目は、する人としらない人が半分ずつです。また、22ページのSNSがあるこ

とで、友人や家族との絆を感じられるという項目も、あてはまるとあてはまらないと  
思っている人が半分ずつです。それは何なのだろうかと、SNS にポジティブな人は全部  
ポジティブなのか、その傾向が、高校生はこう、社会人はこうだと分かれている  
のか、あるいはないのか。絆を感じているけど投稿しない人や、絆を感じていない  
のに投稿する人など、色々な種類の人がいるのか、この辺についてもう少しどうな  
っているのか、これだけ見ると実態がわかりませんが、分析すると多分出てくる  
と思います。質問としては、何か面白そうな傾向はありそうでしたか。社会人は  
こうだということでもいいですし、大体ポジティブな人はポジティブに答えて、  
そうでない人はこうだと、分断している感じなのではないでしょうか。

## ○ 田中委員

私の印象ですが、まずツールが違うということがあります。LINE で絆を感じている  
人と、投稿といったときに LINE であまり投稿というよりは、Facebook、Instagram  
の方が投稿の要素が強いの、主として使っているツールによって違うということ  
があります。また、絆の語感が人によって違い、SNS で絆といわれると、ちょっ  
と違うという抵抗感であてはまらないに回答している人が多かったような印象  
です。多少なりとも「繋がり」ということでしたら、もう少し、あてはまるが多  
かったかもしれませんが、絆という言葉ワーディングしたので、ちょっと低いとい  
う印象です。

## ○ 坂倉副部長

その人が「絆」をどれぐらい安易に使っているかということによって違うとい  
うことですかね。

## ○ 田中委員

傾向というか、あまり相関は捉えられていないと思います。

## ○ 坂倉副部長

実態がわかるようなデータの分析の仕方がもう一步できるといいかと思いま  
す。そういったことから、少し連想すると、今の若い人の SNS の使い方は実態  
としては多分傾向があると思います。いけいけな人の使い方とそうではない人  
の使い方は違うだろうし、そうすると相談の仕方や、ケアの仕方も違って  
いて、だから LINE 相談はなぜ皆が使いやすいのかということもわかって  
くると思います。メンタルヘルスや、就業支援などで、SNS やスマホ、ア  
プリケーションをどう使うのか。そういう人たちの利用実態が見えてくるこ  
とによって、適切なサービスが見えてくることもあり得る。いけいけな人は、  
止めてもやるので、そうではない人に対して、どのようにこういうツールを使  
っていくのかという視点は、今後かなり大事になってくると思います。

また、SNS が結局、分断を作っていくような、似ている人同士が集まって  
きて、自分の都合のいい情報だけが収集できていくということや、そういう意味  
での水平的な分断もありますし、やれる人はどんどんやるけど、やれない人は  
どんどん置いていかれるみたいな垂直的な分断も生んでいくの、だろうと思  
います。それが若者の中で色々な意味での機会をもう少し均等に配分して  
いくために、どういうことができるの、だろうかと、このことをちょっと感  
じました。

最後、これは SNS ですから、コミュニケーションの道具であるということが  
ベースになってきますが、もう少しすると AI 的な、自分がインターネットに自  
覚的にアクセスしているという実感がなく、色々なデータが取得されて、それ  
によって誰が決めたわけでもない情報が提示されていくという社会にどう考  
えても移行してしまおうと思います。その時に、大人はちゃんとしろと言え  
ばいいのですが、小中学生みたいな人がどういうふう

現実を受けとめて、受容していくのかということがもう一步この先に SNS の使い方自体でもジタバタしているのに、その先になったときに、もう少しちゃんと考えていく必要があるのかなと思いました。

## ○ 藤井部会長

ありがとうございます。そうですね。確かにサンプルは非常に少ないですけども、利用はしているけれども、そんなに積極的ではないといった、インタビューの話でも非常に強く感じられました。デジタルネイティブと言われながらも、では上手に使っているのかという視点から見ると、そこには課題もあり、若者たちもそんなに自分たちがすごく使っているわけではないという認識もちょっとあるのかなということにも気づきました。一方で、もっと積極的に使うという声もあったと思いますので、既に若者の利用状況の中に、分断というか差があって、そういう状況の中で若者支援を、例えば様々な機会というものに公平にアクセスできる状況になるのかどうかといったという、支援の視点なんかも必要なのではないかと感じるところがありました。

それでは、最後に笹井会長いかがでしょうか。

## ○ 笹井会長

アンケートは全体の方向性という形で受け止めていますが、インタビューは坂本委員と一緒にさせていただいて、結構本音を聞くことができたのではないかと考えています。

その概況は前回もお話させていただきましたが、一番印象に残ったことは、キャラクターを人工的に作っているということがすごく印象に残っています。私自身も、Facebook では時々投稿して「いいね」をもらいたいということも正直ありますが、色々な人が友達としてるので、どういう人たちを念頭に置いて情報発信するかという時に、こういうふうに発信したら、彼らはこう言うだろうな、こう反応するのだろうなと思って発信するのですが、Facebook は実名主義ですが、そうではないツール、メディアの場合は、特に Twitter は、アカウントを自由につくることができます。このアカウントはこういう自分で、こういうキャラクター用で作る。このアカウントではこういうキャラクターで作るというふうにして作ります。そういう意味では、自分の一部というものを人工的に作り、情報を不特定多数の人に情報発信しているということになるため、そこで仮にいろいろ繋がっても、それは作られた自分で、多分相手も作っている。そういう時のコミュニケーションは、多くの場合に信頼できる情報なのか、情報のコンテンツそのものが信頼できる情報なのかなというのは、正直ちょっと不安というか、疑問に思ったところです。

インタビューの中でも「陽キャラ」、「陰キャラ」という言葉がでてきて、意味がわからなかったんですが、それは明るいキャラクターを「陽キャラ」、暗いキャラクターを「陰キャラ」と言うそうです。そういうことがあり、相手とどう接するか、相手をどう評価するかということを、キャラクターに着目してやっている。だからこそ、自分は相手に愛されるようなキャラクターを少なくとも人工的につくれる範囲内では作りたいのかなと思いました。

ちょっと話は大きくなりますが、偏差値偏重と一時期言われ、学歴偏重になり、東京六大学や日東駒専など略称で言いますが、ランキングの観念でとりあえず相手を評価するということは、まだ残っていると思います。私はそれ以上にキャラクターで相手を評価するというか、どんな人かを見るということがすごく強まっていると思います。キャラクターを人工的につくれるとなると、少なくともメディア上、サイバー空間ではつくれるということになると、人格形成にどのような影響を与えるのかと、ちょっと不安に思っています。結局、多くの場合に、前回も申し上げましたが、他人とのコミュニケーション、他人が自分をどう見

ているかということを通して自分を知っていく、自分で自分のことを認識する、アイデンティティを作っていくということになるのですが、他人が見ている自分、自分が見ている他人が人工的なキャラクターであるとする、それはいいことしか言わないのか、いろんな面が出てきて結局、自分の人格形成に何か影響を及ぼすのではないかと。おそらく多くの場合は、悪影響だと思えますけれども、そういうものが大きくなるのではないかと思います。つまり、アイデンティティの形成や、自分を知るということが、リアルの場合に比べてバーチャルなコミュニケーションを通してそれを行う場合は、乏しい、弱いというかそういうものになるのかなというのが、率直な感想です。

そうすると、青少年の育成や成長を考えたときに、やっぱりそういったものをどう捉えて、リアルの体験を増やすことが一番いいと思いますが、今の子は、大学生を含めて随分忙しい。リアルの体験を行う場合は、空間と時間と仲間が、普通は必要だと言われているのですが、空間も時間も友達も、リアルな友達も少なくなってしまうと、どうやって経験の蓄積を増やしていけるのか、広がりなど一つの問題としてあります。バーチャルの色々なやりとり、コミュニケーションというものが、人間の人格形成に良い意味での影響はあまり与えてないのではないかとということが心配になりました。

もう1点ですが、若い人たちは、先ほどの墓田委員のお話もありましたが、情報収集のツールメディアと、コミュニケーションのツールメディアと、情報発信のツールメディアを分けているような気がします。情報収集は普通のインターネットや、人によってはTwitterでハッシュタグをつけて調べる使い方をしている。仲間内でコミュニケーションするためのメディアが2番目にあり、それはFacebookやLINEであったりすると思っていました。3番目は自分が情報発信するためのツールがあり、FacebookやInstagram、匿名性を保持したい場合はTwitterを使うなど、使い分けをしているのだらうと思います。人格そのものを使い分けて、情報の収集、コミュニケーション、発信という三つの領域についても、メディアツールを使い分けて、コンテンツも使い分けているのではないかと思います。

そういう意味では、コミュニケーションする作業はキャラクターの設定がとても大事になると思いますが、キャラクターの設定力というか、墓田委員のお話に関わりますが、どういうキャラクターを設定していいかわからないという人たちにとっては、私は、特定のグループの中でメディアを使ってのコミュニケーションは、人間の成長、青少年の成長や発達にある意味ではプラスになるのではないかと思います。一般論で言えば、うまく使わないとまだまだ弊害の方が多いという印象を持っていますが、人とのコミュニケーションが苦手、人とのコミュニケーションのパイプが少ないという、困難を抱えている子供たちにとって見れば、そういうメディアを通してのコミュニケーションというものは一定の意義を持つのではないかなと思いました。以上です。

## ○ 藤井部会長

ありがとうございます。それぞれの委員からご発言いただきました。ご質問等や伺いたいことなど、ここからは、皆様のご意見をもとに議論を進めていきたいと思っておりますので、ご自由に質問などいただきたいと思っております。

## ○ 田中委員

笹井会長のお話を伺いながら考えていたことがあります。人格として使い分けるということもあるのですが、目的別に使い分けしているというケースもあるなと思っております。印象的だったのは、西野委員がインタビューされた中で、あるTwitterのアカウントでは、日常の友達とのコミュニケーションを、あるTwitterのアカウントでは自分の好きな作品をアップするという目的で使っているというお話をされていました。自分が好きな世界を尖らせたり、そ

こで一貫性を持って表現することによって、似たような人と出会えることを目的に使われているというお話がありました。40名のクラスメイトですと、同じ趣味の人やアニメの中でもこのジャンルが好きということ出会えないことや、そこを自己開示するまでにすごいハードルが高いだろうことがあります。Twitterのアカウントで一貫性を持って、このジャンルが好きだと言い続けることや、ハッシュタグをつけると、同じような人たちと出会って、繋がっていけるということをしていました。それは、すごく良いというか、同じような趣味、嗜好を持った人たちと出会うにくいところから、出会うやすくしているということをやっと感じました。人格を使い分ける、「キャラ」で使い分けるということと、目的で使い分けるということがあるのかなと思いつつながら、お話を伺っていました。

## ○ 藤井部会長

ありがとうございます。私もインタビューをした中で、絵を上手に書きたいということでは、不特定の意見がとても参考になったという話がありました。身近な人ではないところからの意見がとても意味があるということを理解し、経験したという話がありましたので、今の田中委員のお話とも繋がるかなというふうに思っていました。

## ○ 墓田委員

私も、インタビューをした中で、どちらかというとキャラ設定が弱いタイプの子たちという話しました。田中委員がおっしゃった通り、目的というところでは、すごく軸を持ち、意外にもYouTuberが何人かいたことに驚きましたが、いきなりYouTubeに行くのかと思ったのですが、そういったYouTubeで本当に人生100年と言われている中で、出会えなかったような、過去のそういう出会い方とちょっと一歩違った、目的によってYouTubeを使うことにより、何人かが自分の作品を認めてくれたということでは、直接すぐに自信になっているかということ、彼らたちが外に出さないため難しいのですが、何らかの変化を自分の中でもたらすものとして捉えており、目的というところをすごく考えている。目的を使うために慎重であることが、すごく特徴的だったと思っています。

## ○ 青木委員

それは、相手が、もしかしたら違う人格で接しているかもわからないので、その危険性はかなりあると思います。僕のインタビューした中の1人が演劇が好きで、Twitterでそのグループにだけで発信していました。でも、会って顔を見たのと聞くと見ていないというので、あなたはどう考えているのかと聞くと、やっぱり気をつけていると言っていました。だから、そここのところのラインがある。例えば、僕は教育や学校、地域などの関わりについて勉強しようとする、やっぱり何かの研究会に入ります。そこには全国津々浦々の色々な関係者がおり、そこで色々な人と出会い、うちに講演に来てくださいということなど、どんどん広がっていきます。今のお話は、それに匹敵するようなお話だと思います。ただ、研究会というのは、とても安全で教育関係者が集まり、自分の活動や色々な地域の活動、中には個人情報的なこともお話しする機会があります。それが、ネットの中になってしまうと、同じようにしてしまうと非常に危険な場合もありますよね。

## ○ 墓田委員

やはり危険というものは、年齢別にも、色々な教育といえますか、何かきちんとした情報を入れていかなくてはならないと思います。先ほど坂倉先生から、今後、低年齢層が使っていくことでの危険性があることは、この協議会でも考えていかなくてはならないことだと思います。どうしても、先ほど坂本委員がおっしゃったTikTokなど色々なSNSの種類によつ



ても、人との出会い方が違ってきます。元々、TikTok みたいなものは、誰かが見つけていくというのではなく、最初から 100 人の人にちゃんと流れるように、常に違う 100 人、100 人というようにやるようなものですと、色々な出会いの危険性がその中にありますが、1 人の人に固執して、もしかしたら向こうがキャラを変えてちょっと危険な人かもしれないという人にしがみつかなくても、大丈夫な仕組みになりつつあると、この間、TikTok の勉強会で聞きました。そういうことも工夫はされているところもあります。とはいえ、やっぱりそのどういう人と出会ってしまうかという、危険なところは、確かに目的というところではあるというのは、事実としてわかります。

#### ○ 青木委員

それさえクリアにしてしまえば、ネットの情報量の多さ、そしてまた多種多様の区分をしていけば本当に、出会いは広がるような気がします。そこが一番の懸念ではないかなと思います。

#### ○ 墓田委員

難しいですね。やっぱり、なかなかクラスに友達がなくて、目的のところ自分ですごく良い言葉をかけてくれる人のことを信じやすい傾向の中にはあったので、それが本当に同年代の女の子とは限らないという、そういう社会であると、そこは教育の場なのか、どういう場なのか、きちんと対応していくかっていうこと本当に考えていかなきゃいけないことですね。

#### ○ 藤井部会長

そういう不安は、多分若者も持っていると思います。5 歳など小さい子どもに今、伝えるとしたらどういうことを伝えたいですかと聞くと、情報は消えないものだということや、基本的な活用について自分が小さいときにもっとちゃんと知りたかった、教えてもらいたかったという声もあったと思います。そういう不安を抱えながらも、利用しているということなのかと思ったところがあります。

#### ○ 青木委員

現実問題、対面していても、嘘をついているかもわかりませんから、現実に対面していても、その危険性があるのは確かです。そのところを若者はどう考えているのかは、インタビューをした限りでは、やっぱり範囲を制限しているということが多かったので、危険性を感じているのだなと思いました。その中で、本当の繋がりがいいのかという不安を少し感じました。

#### ○ 藤井部会長

他はいかがでしょうか。

#### ○ 笹井会長

結局、若い人たちが、ここまで SNS や色々なメディアにコミットして、生活の大部分になっています。大部分にです。そうである以上、地域の教育的な立場に立つ人や、青少年行政当局は、やっぱり積極的に活用していく必要があるだろうと思います。それは適切な範囲内でそういった可能性を行政の何らかの政策に生かしていただきたいと思います。今の若い人たちの現状を踏まえた上で、どのようにメディアを利活用してもらうか、あるいは行政や団体が活用することが、彼ら、彼女らの成長、発達に寄与するのかという観点で考えていくこ

とが大事だと思います。以上です。

○ **藤井部会長**

このことについて、ご提案や、取り組まれていることで、こういった可能性があるのではないか、あるいは難しさがあるのではないかとといった点はいかがでしょうか。

○ **笹井会長**

すいません。自分で問題提起をしておいて申し訳ないですが、若い人たちは情報収集ツールとして情報を集めるだけ、あるいは、これはコミュニケーションとしてと、分けているという認識があるので、情報収集としてはきちんと使っていると認識していいと思います。だとすれば、メディアを使って情報発信を我々はしていくことはとても大事だと思います。いろんな Twitter も含めて、トランプ大統領ではないですが、Twitter がメインになってはいけないと思いますが、発信していくという努力は必要だと思います。

○ **坂本委員**

スマホを持っていると何かを調べようと思ったときに、真っ先にネットで調べます。その先に掘り下げていって、資料や違うソースにあたることがありますが、まずネットで調べることになります。逆に、ネットにないものは、もはやそれは存在しない情報といいますか、たどり着けない情報なのかなというふうに思います。相談をするのも最初に、グーグルクロームに最初に入っても、そこで相談ページがありますとなっても、ちゃんと自分の気持ちかもやもやだから相談したいのに、それを言語化できないから相談できないまま終わるかなと思いますので、そういったことから、まとめずに、普通にパラパラ送れる LINE や Twitter は、若者にとってやりやすいツールなのかなと思いました。

○ **田中委員**

夏休み明けに、「学校無理でもここあるよ」というハッシュタグが、フリースクールを中心に居場所系の団体の皆さんがやられていたのを目にして、効果的だなと思いました、「Me too」もそうかもしれないですけど、やっぱりハッシュタグで拡散していくようなキャンペーン的なものは、ある程度、効果があるのかなと思いました。

○ **西野委員**

自殺対策では、色々なところで、こんな思いをしている人がいるのかということや、世の中にはこんな場もあるのかということに出会う意味では、かなり効果的な使い方であったと思います。それから、とりあえずここに来れば、安心して休めるかもしれない。誰かが話を聞いてくれるかもしれない。自分の辛さを受けとめてくれるかもしれないと思えるだけでも、少し気が楽になったということは、大分あったなと思います。

○ **坂倉副部会長**

そういう感覚はとても大事だと思います。行政側や学校ですでに働いている大人の情報収集、常識は、ちょっと一旦置いておいて、困ったときにどう行動するかという中学生、高校生、大学生が、まずどういう情報行動をして、そこに提示されるテキストをどのように読み、どのように感じているのか。そういうことをちゃんと感覚的に理解できた上で、ソーシャルメディアコミュニティのマネージャーのような職種が今結構あると思いますが、一般企業でいうと、Twitter や Facebook など、消費者に直接コミュニケーションして、ブランディングをしていく人が結構いますけど、何かそういったネット上のコミュニケーションを専門にや

って、青少年のケアをするような人たちが、神奈川県にはある。神奈川県にはそういった団体や、県庁のある部門で専門にそれを行っているといったことが多分本当は必要なのではないかと思います。多くの悩んだ若者は絶対に、ネット上でまず探すので、そこが結構リスクの入口で、それでブラックの方に引っかかっているわけです。ここに来たら大丈夫だよという人がいっぱい世の中において、どちらかという、ちゃんとした人が少数派で、あとは大体そういうのを上手く引っかけて、搾取して儲けてやろうみたいな人たちがうごめいているので、そういうところをちゃんと見て回って、困ったときに、ちゃんとした安全な方に引っかかるようにしていく。何かあったら、相談にのるという政策があってもいいと思います。そこまでいけば、LINEなどと提携できると思うので、LINEのアラートでデータをとりつつ、今そこに起きそうなリスクをちゃんと事前にLINEの使われ方の方から察知していけるような組み方をできるだろうと思います。おそらく、そういったことをちゃんとやるのであれば、そういう専門の機関をつくっていくことが大事なのかなと思います。

## ○ 西野委員

家に帰れない、帰りたいけれど帰れない子ども達、若者達は、実は相当な数が世の中にいると思っています。やっぱり、この世の中は、子どもはお家に帰りましょうと、家に帰るのがあたり前という正論で成り立っていますが、家に帰った方が地獄で、家に帰ったら親父が酒を飲んで暴れて、お母さんを殴っている、性行為を強要してくるから家に帰らない方が安全だけれども、帰らなければならない。親権を持っているのは親だからという中で、相当生きづらさを抱えている子たちに対して、本当に悲しいかな、お医者さんを装った人にやっと助けてもらえんと思ってその人の車に乗り、性被害にあう。そういうことが持ち込まれてくるので、どうやったら若者たちが性被害にあわない、安全で安心な居場所に辿りつけるような仕組みができるかなということが、ずっと気になっています。

## ○ 墓田委員

先ほど、言語化が難しいということがありましたが、事実として、言葉にできない辛さを抱えている子ども、若者もいるので、その辺が本当に県としてLINEが一番吐きやすいかわかりませんが、言葉にしてはいけないとずっと思い込んでいるものを、言葉にできるという場づくりは、本当にネットで探すときに、みんなネガティブキャンペーンの方になってしまう。そういう人達は悪い言葉、悪い言葉にいつてしまっていて、辿り着くことが多いので、その辺がさっきのようなハッシュタグのところで、学校無理でもここはあるよという、お父さんが怖くてもこうじゃないですけども、具体的にそういう言葉を出してやっていくことが、行政であってもいい。もうそこまでの時代になってきたのかなというぐらいに、西野委員がおっしゃっていたような家庭が少なくない状況で、ごく普通に見えるところでもそういうことが起きているという現実が支援では見えてきますので、その辺に深く入っていくと良いのですが、どうしたらいいでしょうか。

## ○ 青木委員

県の方には相談センターのようなところは、あるのでしょうか。

## ○ 青少年課長

子ども・若者総合相談センターがあります。

## ○ 墓田委員

でも、そういう相談センターは敷居が高い。自分の悩みが、相談に匹敵するかどうか子が

どもでは、分からない。こういうときは、ここに来なさいという可視化したポスターではないが、そうしないと分からない。

## ○ 青木委員

もっと相談しやすいようなレベルに下げたしまえば、いいのでしょうか。安心ですね。公的機関ですから。

## ○ 西野委員

例えば、ハッシュタグで「学校駄目ならここあるよ」という形で、ネガティブキャンペーンにいかないような、罠にはまらないハッシュタグの付け方ではありませんが、どのようにしたらいいのか難しいです。例えば、ひきこもっている人達が SNS を見ている、アカウントのパスワードを変えないと危ないですよと言われ、新しいパスワードを設定されてお金を持っていかれてしまうことや、個人情報盗まれるという被害が結構あります。

また、鬱傾向の人たちが、Twitter を読み、どんどん怒りが増幅していく。依存的に見てしまうのです。時間があるから何時間も見てしまう。家にいて、寝転がりながらタブレットを見ている間に、ここではこんなことがあって、この政権ではこんなことが起きているといったネガティブなものを見ている間に、メンタルが全然保てなくなっていって、怒りが増幅して怒ったり、落ち込んだりしている。ネットに依存的になっている。怖いと思うことは、デマ情報が流されると、一気にあいつらが悪い、あの国が悪い、あの政治家が悪いと攻撃的になるという、SNS を見ている時間が長い子たちが、決して心が穏やかになっていない。どうできるのだろうかと思います。難しいです。

YouTube でゲームをやっている姿を、ずっと 10 時間くらい見ているみたいなのは結構います。やることがないから、YouTube でこの人こんなふうにしてゲームをクリアしていくのかとをただずっと見続けている。それはそれで何とか、ある意味、自分のメンタルが壊れないために必要なのかもしれない。そこに逃げ込めることで、少し現実から逃れられることが必要な子もいるのだろうかと思いつつ、生きづらさ、困難を抱える子ども達、若者達に果たしてどんなメッセージが伝えられるのか。

親のお金を課金で相当使ってしまったという相談が増えました。親子関係で LINE を使って命令して、俺のゲームを売ってこいと言って、新たに親が買いに行かされるという相談も時々出てきます。今まで面と向かって言っていた、このゲームを親から買ってもらったけど申し訳ないけどこれ売ってきて、新しいのにしたいということも、顔を見ないでやりとりしている親子も結構出てきています。

困難を抱えている子たちの SNS の使い方といっても、どんなメッセージが伝えられるのかなと難しいと思っています。

## ○ 笹井会長

結局、なぜネガティブな発言や、人を叩く、あるいはリツイートも含めて、そうなるのかといいますと、匿名性が大きな原因だと思います。もちろん、警察の捜査として何か悪いことした人は、捜査すれば Twitter でも誰が言った方がわかるはずですが、基本的にはそういう情報はオープンになってない。でも、一つの考え方ですが、今の子どもたちは実名主義の Facebook から離れている子が多く、何でと聞くと実名だからということがあります。本当は実名主義を徹底することが一番大事で、少なくとも我々というか、信頼できる情報発信をする人は実名で発信する。でも、そうすると「なりすまし」ではないですが、嘘の情報で神奈川県を名乗る人が出てこないとも限らないわけですが、実名主義を徹底するべきだとは思いますが、実名で問題がない人だということを確認してもらうために、悪いことする人を排除

し、正確な情報だということを確認してもらうためには、どうすればいいのかということになるのだと思います。この分野に詳しい情報系の会社や、専門家に聞かないと、ネット上で自分の身分の保障はどうできるのかはわかりませんが、予め緩やかなネットワークを作っておくということは、一つあるだろうと思います。そうしたネットワークに加盟しておいてもらい、もちろん県だけではなく、民間のNPOの方々も含めてそういうネットワークの中で、ある意味クローズドにしておき、その中で必要な情報を実名で出して、その中のネットワークにいる人で実名で問題がないとしておかなくてはならない。

## ○ 藤井部会長

ありがとうございます。かなり具体的な形でご提案ということだと思います。様々な諸機関と同時に、NPO法人等による相談業務を請負っているところでの緩やかな繋がりネットワーク化というものに取り組むとよいのではないかというご意見だったと思います。

私が聞きたいなと思いましたが、例えば神奈川の青少年が、電話相談や相談窓口等、行政が取り組んでいるところと、墓田委員が取り組まれているようなところで、例えば子どもから見たときに、行政がやっていることと、墓田委員がやっているようなところで、違いを感じているのかどうか、ハードルのようなものがあるのかどうかなどについて少しお伺いしたいと思いました。そのあたりを墓田委員の方で相談に来る方から、例えば相談のしやすさといった点などで気づいた点などございますか。

## ○ 墓田委員

西野委員と私のところは、対象年齢に少し違いはありますが、同じようなことをしています。よく言われることは、本当に公的なところにまず行くことが怖いと思っている理由は、怒られるのではないかと思うようです。公的というのは、小さい頃から義務教育など、学校では正される。私たちのところに来る子たちは、無業で、どこにも社会に所属がない方たちです。自分たち自身も、ダメダメと思っているから、駄目の駄目出しはもうされたくないということで、私たちのような、NPO法人にゆるい感じで、居場所と言っていますが、パッと見てもらうとそこで若者の就労支援をしているのですかというような場所です。最低限のルールを守ってもらい、一緒に自由な感じで話せる。それはどういうことかといいますと、雑談スペースのような大きなテーブルの中で、ちょっとスタッフが立ち話しや、すれ違った瞬間に、話を聞いて本当に深めたいときに相談室に、みんなにわからないように何気なくちょっと違うところに行くというところが、楽チンですと卒業した子達から言われました。最初からこの時間に来てください。この時間から相談時間50分ですというのと、相談といっても何をしたいかまずわからない。困っているけれども、何を話していいかわからないので、公的なところは使えなかったという意見はありました。

## ○ 西野委員

やっぱり、弱さが出せるということが、鍵になると思います。正しいか正しくないか、善か悪かという、限りなくグレーな話でも、まずはその子の揺れに寄り添いながら、危うさも出せてしまうところが大事だと思います。墓田委員がおっしゃるように、相談室で話すことは、レアケースです。僕は、「ながら相談」という言い方していましたが、何となく何かしながら、僕らの現場の夢パークは焚火しながらも話せるし、料理を作りながらでも話せる。一定の場所の相談室に入ると、例えば人間関係のトラブルだと、あいつは私のことをスタッフにチクっているんじゃないかと思われると落ち着かなくなるので、散歩をしているように見せながら、話しています。型にはまって面と向かい合って相談することは、少ない。よほどのことがないとね。そういうハードルの下げ方をSNSでも、どうやってできる

のかなと思います。僕は、チャイルドラインに長く関わってきましたけど、匿名性があり、嫌だったら切っていいという、主体があくまでも子どもの側にある。この人は、話を聞いてもらえそうにない、説教が始まったとか、自分の言っていることを疑っているように感じると思ったら、いきなり切ってしまうでもいいということまで保障しないと子どもがアクセスしやすくなれないということです。実際のデータでは、行政相談の数とチャイルドラインで子どもたちがアクセスしてくる数は、チャイルドラインの方が多いです。

どうやってハードルを下げつつ、弱さを出せるような、ダメダメでも、駄目さを寄り添ってくれるようなことです。リストカットをしたらいきなり説教されてしまうようでは、元も子もないというか、切ることで辛うじて自分を保っている子どもたちもいるので、聞き手の側の専門性といいますか、リストカットしてしまう若者の話の聞き方なども含めて、ある程度スキルが必要だと感じています。

## ○ 笹井会長

今の点に関して、我々も含めて今、情報通信システムの中に取り込まれています。例えば、LINEはメッセージで既読がつかないといったことを気にして読むといったことは、半強制的に読まされるということがあります。余談になりますが、パソコンがまだ出だしの90年代の頃に、私の当時の上司がWindows95をしょっちゅうフリーズさせていました。フリーズして、強制的にシャットダウンして再起動させると、今度はちゃんとシャットダウンをプルダウンしてクリックしてくださいとパソコンがメッセージを流します。今はそんなに不安定ではなくなりましたが、昔は強制的にシャットダウンすると、ちゃんとやれよというメッセージをパソコンが出してくるわけです。それ見て僕の上司がパソコンのくせに生意気だと言い出していました。つまり、パソコンのインターフェース、やり方にこちらが合わせさせられているわけです。インターネットのアクセスから始まり、どのように情報収集するか、どのようにコミュニケーションするかというものも、既存の技術の枠組みの中に私たちが合わせさせられているところがあるわけです。つまり、巨大なそういうシステムがあって、合わせさせられているというのがあり、でも、困難を抱えている子どもたちは、そこからはみ出ている子どもたちです。一般的な社会のシステムにいる上の、例えば、こういった言い方は申し訳ないですが、県庁など要するにシステムの上にいるというか、中にいる、あるいは上にいる人達がコミュニケーションをしようと言っても、外にいる人たちは躊躇するのだらうなと思います。もっと、機能的に社会的に公共的な活動をしているNPOのようなところが、やっぱり対等な関係性を築けると思います。どうしても県や市町村ですと、上から目線ではありませんが、システムそのものが上下関係にならざるを得ないので、統治をしている側からどうですかと聞かれても、やっぱり躊躇するのだらうなと思います。だから、同じ立場でコミュニケーションしないと、本音を語れないというか、弱さを出せないという部分がある。その意味では、県の公的な施設よりも、もっと自立的にボランタリーな立場で活動しているNPOの方が、あるいは、個人のやっている臨床心理士さんなどの方が対等な関係性を築けるのではないかと思います。

## ○ 西野委員

青少年の困難を抱えている人達には、問題解決型で相談にあたらうとすると苦しくなってしまう。だから、解決されないかもしれない。答えはないかもしれない、答えは出ないかもしれないということにより添える支援、そういうアプローチでないと困難を抱えている人たちは、アクセスしてこないし、さあ、これで君の問題を解決しましょうとすると、どうかすると死に追い詰めるくらい心配事になるかもしれない。だから、変えようと思っても変えられない自分。そう簡単にはいかないもやもや感に寄り添えるような仕組みを、どうや

って作れるかなと。寄り添い型の支援がどうできるかというのは大きいなと思います。

### ○ 墓田委員

相談業務をしていると答えをある程度、支援する側が持っていないとはという気持ちになってしまう傾向にあります。相手が、この人は答えを持っているとすごく敏感に感じる場合がありますから、答えはなくても今日は世間話だけで終わるような状況でNPOなどはやっています。公的なところだと、世間話で終わるということが、税金を使っているなどの枠があることは、私たちも十分理解していますが、なかなかその辺が答えに導き、指導して手を強引に繋いでという方針に見えてしまうところがあります。そこを緩くできる仕組みや、やり方、態度などを研修などをすればよいのか。そもそも、相談について、場づくり、ハードから考えていくのか。今、時代がこれだけ変わってきたので、もっとゆるい、先ほども言いましたけれども、キャリアバーやキャリアカフェなど、深く話したかったらちょっとあつちで、2人でしゃべれるみたいなことなども含めて、試していくということも必要なのかもしれないと、私は支援の現場からそのように思います。せつかく、これだけ素晴らしい機関があるので、その活用の方法を今まで通りの、昭和からやってきたやり方だけではないものをトライアルできたらいいのかなと思います。

### ○ 藤井部会長

相談というと、時間が決まっており、何時から何時に面談という形の手前にあるようなところをもうちょっと開拓して掘っていくことで、緩やかな相談というものも可能になるのではないかというご提案、ご意見だったと思います。他に何かご意見等ございますか。

### ○ 坂倉副部会長

個別具体のインフォーマルな、緩やかな場が増えることが大事なことだと思います。一方で、並行して先ほどの情報行動から相談に行くという流れは、時代に合わせて作ったほうがいいだろうと思います。青少年の公的な相談機関一覧を見ていると、何でこんなにいっぱいあるのだろうと思います。障害に関することだと分かれている必要があるのかもしれませんが、この一覧表上の4、5機関については、どこに相談をしたらいいのかというだけで、かなりストレスだと思います。だから、ワンストップにしていく必要は絶対にあり、これまでも沢山その話はあったのだと思うのですが、しかも電話の場合はここだけ、並行してやっぱりLINEやチャットでも相談をやってきますよというような何か、双方向性や、他にもいっぱいそういう相談している人がいるのかという、電話しかなかった時には命の電話のようなことしかできなかったことが、その機能はちゃんと確保しつつ、違う入口もあって、何かこれまでできなかったような総合的なものも、そういう情報も受け取れるように作っていかないと何かあったときに、あそこに行けば良いというふうに、なかなかならないような気がします。ワンストップ化とスマホからアクセスしやすい形のサービスをしていく必要があるかなと思いました。

### ○ 西野委員

神奈川県では、「神奈川子ども・若者総合相談センター」が基本的にはワンストップ化を目指したのですよね。早い段階で僕もこの相談員をしていた時期がありますが、NPOの相談員もいるという形を目指していました。親たちには、随分相談の場所として機能してきたのではないかと考えているのですが、相談が16時で終わってしまうなど、若者が直接アクセスするには、厳しい。そういうところを、より若者も使いやすい、総合的なワンストップ窓口を目指して少しの改善というか、その辺は今、行政課題としてどういうことがあるのかがあ

りましたら、教えていただけたらと思います。結構、親たちの相談は広がってきたかなと思います。若者たちの相談をどうやって受け止めるのかというところが、鍵になるという気がします。

#### ○ 墓田委員

課題を抱えていると、親御さんは意識が高い方は相談に来られるのですが、実際にその本人、当事者を神奈川県センターまで連れていけるのかというと、電車に乗ることなどがすごくハードルが高いので、私たちは親御さんと繋がったら、オンラインで本人たちとチャットでの相談と、ビデオ会議システムの電話を使って、私たちは顔を出し、本人は顔を出さず、出さないという選択権がある。そうすると、意外と本人が出てくることがあります。やっぱり、電車や車に乗って1時間とか30分を使わずに、お母さんが、機嫌が良さそうなのでちょっと代わってみますという、隣に本人がはじめましてと来て、でも僕は顔を出したくないのでと顔をぬいぐるみで隠すなど、そういうアクセスができたりします。今、便利な情報を探す方法もあるので、コンタクトの方法も多様化していますから、少しずつワンストップのところでそういうものを導入できるといいのかなと、お話を伺っていました。本当に、ちょっと今息子がペットボトルを取りに来たのでと、お母さんが台所でオンライン相談していたら、息子が「ちょっとお母さんが相談している人の顔を見る」と言って、相談するのではなく見るというか、私の顔を見せて、そうしたら「はじめまして」と言ってそのまま帰ってしまうということもありましたけど、出会えない息子さんに出会えて、ちょっとイメージと違ったけど、こういうことを感じたとお話をして、そういうふうに見えましたかと、それでまた深まり、本人が次回からは顔出さないけど、ちょっとだけ話してくれるようになるなど、意外にもそういうことがありましたから、何か通信手段の方法を、色々新しいものを加えることができるのであればと思います。

#### ○ 青木委員

相談する相手の人材の関係もあると思います。やっぱりそういうふうに便利にしたほうがいいと思います。集中してやった方が。県でそういう窓口をいっぱい作るのには、人材をたくさん配置しないとなくなったり、非常に非効率になってきます。LINEで1ヶ所に集中できるようにしてしまえば、本当にワンストップでできる。

#### ○ 墓田委員

ワンストップですと公平性もありますので、LINEや、ビデオ電話を使うと何とも繋がりますから。子どもの方がそういうことに強いですから、最初にひきこもって10年ぐらいいた子が、お母さんために設置してくれて、お母さんと会話ができるようになったという意外なこともあります。

#### ○ 西野委員

顔の部分にスタンプを出したまましゃべることができる機能はありますか。

#### ○ 墓田委員

そうした機能はあると思います。

#### ○ 西野委員

そうすると、僕が出会っている子たちは着ぐるみが好きなので、着ぐるみや仮面を付けるとすごい本音を喋ってくれるので、今のお話のように、こっちの顔を見せるけど、本人は画



面上にはスタンプで、でも体つきや声、皮膚から出てくる叫びや怒りや悲しみを、全く声だけ聞いているのとちょっと違う。本人の姿をみることができる。

○ **青木委員**

そういうのは、やっぱり匿名性を重視したいのですよね。最初はね。相談される側はやっぱりきちっとしたところだよと、安心できる人だよということは、表現してあげないと駄目だろうなというところがありますね。

○ **笹井会長**

今の議論に関連して、一つは技術的な話ですが5Gという通信網が来年春から試験的に始められ、再来年ぐらいに本格実施されます。5Gは、今の4Gの通信量の100倍になります。そうすると、今以上にテレビ電話を簡単にできるし、テキストだけではなく、顔も見えるようなメディア上のバーチャルな関係性をつくることができます。バーチャルではあるのですが、少なくとも安心や信頼ということに繋がってくるだろう。技術的にそれが可能になりつつあるということだと思います。

もう一つはちょっと別の意見ですが、居場所の問題があり、今、居場所を求めている人達は、すごく多い。リアルの世界でなかなか居場所がないという人たちは、結構バーチャルの中で居場所を求めている。場合によっては、悪い人にそういう情報を受け取られてしまうこともあります。バーチャルな居場所を求めているようなことがあるのかなと思います。そういうもので、本当に健全で楽しくて、ほっと出来て。しかもわくわくできるようなバーチャルな居場所をどう作るのかという観点も大事だと思います。

○ **藤井部会長**

そろそろ、時間になってきたのですが、何かぜひ言っておきたいことやお話ししておきたいことがございましたら、お願いします。

○ **墓田委員**

笹井委員がおっしゃったそのバーチャルの居場所って本当にオンラインサロンが色々主流になってきて、私たちが今試行的にちょっと始めようかと考えています。それを県が主催して、オンライン上のサロンのようなものがあると安心、安全なのだろうなと思いました。かなり、県の中でやることはハードルが高いかもしれませんが、将来そういうこともあると思います。

○ **笹井会長**

それは、先ほど坂倉先生がおっしゃいました、県が指定したソーシャルメディアコーディネーター、SMCみたいな人が主催してくれるとそれはそれでよろしいのかなと思います。

○ **藤井部会長**

よろしいですか。それでは事務局は、皆様のご意見を聞きまして、最終報告案の作成を進めるようお願いいたします。

続きまして議題2「令和元年度神奈川県青少年育成活動推進者表彰受賞者」についてです。事務局から資料の説明をお願いします。

○ **調整グループリーダー**

(資料2により説明)

○ **藤井部会長**

ありがとうございます。ただいまの説明につきましてご質問、ご意見ございますでしょうか。

○ **西野委員**

ぱっと見ると、神奈川県青少年指導員表彰を受けて、1、2年すると、青少年育成活動推進者表彰になっているのかなと資料をみて思ったのですが、こういった違いがよく分からないのですが、青少年指導員表彰とこの青少年育成活動推進者表彰というのは、どういう違いがあるのでしょうか。

○ **青少年課副課長**

青少年指導員表彰は、神奈川県青少年指導員連絡協議会として、青少年指導員を対象とした表彰となっています。今回の育成活動推進者表彰は、青少年指導員に限らず、広く様々な団体や個人を表彰しています。各市町村が、指導員表彰を受賞した青少年指導員の方を推薦していることが多いかもしれませんが、特段そういう規程はなく、別のものとなっています。

○ **西野委員**

はい。

○ **藤井部会長**

他はいかがでしょうか。よろしいでしょうか。それでは本年度の候補者について案の通り表彰するという事にさせていただいてよろしいでしょうか。

(異議なし)

では、本日の議題につきましては以上でございます。その他何か皆様からご意見、情報提供などございましたらお願いします。よろしいですか。それでは最後に事務局からお願いいたします。

○ **青少年課長**

本日は、お忙しい中、また大雨の中、非常に活発なご議論をいただきましてありがとうございます。いつもながら、改めて気づかされることが多く、県でもいろいろ工夫をしていますが、NPOさんの相談との違い、自分たちでは、それほどハードルを上げているつもりはなかったのですが、やっぱり感じる方にとって、そういうことがあるのかと改めて気づきました。また、SNS等を使った青少年の育ちに関することとして、実際にトラブルを抱えてそういうところから犯罪になる、つけこまれてしまっていることに対しても、情報行動をどのように青少年の方がとられるのか、そこから考えていく必要があるというご指摘について、確かにそうだなと思いました。まず、青少年が何を探すのかというところで、どのように探したときにアクセスしてもらえる形にしていくのかについて考えていかななくてはならないと、納得とともに、ではどのようにしていくことができるのかと考えているところです。神奈川でもこの10月からLINE相談を始めましたが、それも難しく、非常に重い相談もあり、試行錯誤しながらやっています。ぜひ、今日いただいたようなご意見を参考にさせていただきながら、報告書を整理させていただければと思っております。

次回については、12月6日金曜日午後2時から4時に第9回企画調整部会を予定させてい

ただいております。詳細が決まりましたらご連絡させていただきますのでよろしくお願いいたします。以上でございます。

○ **藤井部会長**

それでは第8回企画調整部会を閉会したいと思います。お疲れ様でした。ありがとうございました。